＜2010年度 社会学科 鵜飼ゼミ 卒業論文 要約・相互批評集＞

（同志社びわこリトリートセンターにて卒論合宿　2010.1）

この卒論相互批評も 2008 年度、2009 年度に続いて３年目となりました。今年は全員が全員の批評を書くことに挑戦しました。さて、その成果は…

放っておいても自分のやりたいことをしっかりやって、ちゃんと卒論も書いてくるという意味では、やりやすいゼミでした。それにみんな協調性もあって、一緒に旅行やコンパもよくやりました。でも、見事なまでに誰も自分を変えない、頑固な人たちでもありました。それが卒論にもよくでていました。皆さん、もうちょっと柔軟性あってもいいのではないかな。あるいは他者に対する感受性というか（鵜飼に言われたくないって？）論文そのものは書き直した回数に比例して完成度が上がっています。私のゼミ方法論もここに至って煮詰まってきてしまいました。そろそろモデルチェンジの時期ですね。ただ一人、考え込んでしまったＧＡさんだけ留年となりました。まあ、それもよし。先は長いですからね。みんな元気で。（鵜飼）

＜目次＞ 山田繭子（１）、高橋義知（４）、大谷卓史（７）、太田明人（１０）、村井唯（１３）、宮本知明（１６）、松原直輝（１９）、近藤千紗子（２２）、河本廣徳（２５）、日比大輔（２８）、百田稔宗（３１）、保田慶輔（３４）　以上、学生 ID 番号の逆順に（最後くらいはネ）

山田　繭子

大阪に根付く笑いの文化　――吉本興業と劇場を例に――

今やテレビをつければ数多くのバラエティー番組が見かけられ、そこには常に複数のお笑いタレントが出演している。お笑いだけでいくつもの企業やビジネスが成立し、学校まで存在する。人気芸人を集めた大型イベントを開催すれば、一度に巨額のお金が発生するのである。これほどまでに多くの人や社会を動かす“笑い”には一体何があるのだろうか。

本稿では、「笑いと人」「笑いと社会」をテーマに、現代社会において笑いがどのように存在しているのかを“吉本興業”と“劇場”を手掛かりに解明する。私自身の吉本興業での経験と、その中でも昔から変わることなく事業の中核を担う劇場へ、実際に向かい調査することで、笑いの文化は劇場から生まれ、そこに集う大阪の人がいるからこそ笑いの文化は絶えることがないという事実が見えてきた。笑い・吉本・芸人・観客、これらは相互に必要とし合う中で発展してきたのであり、それはこれからも変わることはないのである。

［キーワード］大阪、笑い、吉本興業、劇場

［相互批評］

お笑いがメディアを席巻していると言っても、芸人の多くは関西出身者によって占められている。その元締めが吉本であることはいうまでもない。著者は大学時代を吉本所属のタレントとして活動してきただけに、その論文の記述もこの手の卒論にありがちな表面的記述にとどまらない迫力があった。本論のポイントは吉本流の笑い、延いては大阪の笑いの本質を劇場（寄席からホールまで）に見据えている点であろう。それゆえに安易にテレビ芸人が増え劇場での笑いを忘れつつあるところに、今のお笑い文化の衰退の兆候を見ることもできるだろう。(鵜飼)

まず論文全体としては笑いの文化について筆者自身のフィールドワーク、参与観察を踏まえて事細かに書かれており、質の高い論文に仕上がっているのではないだろうか。しかしながら本稿のテーマである「大阪に根付く笑いの文化」ということに関しては少し方向性がずれているのではないかと感じた。吉本興業や笑いについてはよく研究、考察されているが、大阪の文化との接点について論じられている箇所は少なく、テーマとの関連性を考えた場合、最終部で話を戻した感じが否めない。そこが残念と感じる。(高橋)

東京で生まれ育った私でも大阪のお笑い芸人とは身近な存在のように感じられてきた。TV でよく目にするだけでなく、最近は吉本の劇場が東京にも作られて周りの友人たちがお笑いについて口にすることも影響されている。しかし、やはり劇場でのお笑い（特に漫才）というものは馴染みがないため、本論での劇場でのお笑いについての描写は新鮮である一方で TV を通して

お笑いを受け取る視聴者と観客との違いは見られないように思われる。舞台を評価することに共通点があるが、評価の仕方によって地方との違いはあるであろうし、本論でも触れられている。昨今のお笑いについて劇場というスポットに限定し、着目し論じていたので分かりやすかった。(大谷)

山田さんの論文の特長はやはり、自分の経験もまじえての「ディテール」だったと思う。しかも、劇場に足を運んだ客の行動や、運営側の、つまり内部事情、そして芸人の分析など、自分の言葉で語っているという印象をこの論文から受けた。しかも、それだけの具体的な情報量にもかかわらず、自然と読めたということは、それだけ論文としての構成が優れていた証拠だろう。劇場とテレビというある意味正反対の舞台の両方で、同じようなパフォーマンスをあげる芸人という対象(どこでも余興を楽しませるといことが、古来、芸人の条件だったのかもしれないが)は、面白い選択だったと思う。(太田)

山田さんが実際に NSC で経験したことを踏まえて論じられていたので、説得力があり読んでいて飽きない論文でした。やはり、大阪でお笑いが発展したには、大阪ならではの実質的な「自分で理解し、判断する」という考え方から、お笑いの評価が個々の厳しい目に晒され続けたからかと、思いました。だからこそ、一辺倒ではなく多様で多角的なお笑いというものが生まれたのだと思います。これからも、身体的なコミュニケーションが減りつつある現代社会だからこそ、人の温もりを感じることが出来る「笑い」という行為を、吉本の人に継承しそして、世の中をあたたかい笑いに包まれたものにして欲しいです。(村井)

吉本、そして笑い、というまさに山田さんらしいテーマで、非常に面白い内容でした。笑い、という大阪に根付く文化をビジネスとして成功させた吉本興業の偉大さ、そしてテレビが普及し、バラエティー番組などお笑いの番組が毎日当たり前に流れている中で、今もなお劇場で活躍する芸人たち、そしてそこに足を運び続ける人達など、様々な角度から笑いというものに対して真剣に調査、記述されていて、笑いというテーマの身近さも手伝ってか、非常に面白い内容だったと思います。(宮本)

まず何よりも読みやすい。自分が書いた論文が恥ずかしく思わされるような論文だと思った。また、芸能界についての記述・インタビューは吉本に所属（していた？）している山田さんだからこそできるものであって、日頃その存在は非常に強く感じるも、実はその中身はほとんど知らない世界についての記述は眉唾ものであった。また、大阪・吉本の例を中心に議論は進んでいくが、東京についての考察になった場合はどうなるのかといった期待を持たされるような

いい論文だと思った。(松原)

「笑い」をテーマにするのはとても面白いと思いました。笑いにも色々種類があると思う。ただ、一言に笑いといっても年代や、生まれた土地、育った場所、性別などによってその「笑いのツボ」というのは様々です。例えば、東京の人は新喜劇を見ても何がおもしろいのか分からないそうです。どうやったら、人の笑いの尺度ができていくのかが気になったので、機会があれば調べようと思います。(近藤)

日本のお笑い界を長年牽引してきた吉本興業とその劇場の成り立ちや実情についての詳細な記述は、読んでいて非常に新鮮なものに溢れていました。フィールドワークに出かけて得た情報等は普段からお笑いに関わっている山田さんだからこそ可能だったでしょう。ただ、笑いを提供する側、享受する側を取り巻く状況は理解できたのですが、「笑い」を人々が求める理由についてもっと踏み込んだ記述があればより面白みが増したのではないかと思います。(河本)

吉本興業がお笑いという世界に占める地位はもの凄いものだと感じます。近年ではテレビに必ずといって良いほど、お笑い芸人やタレントが出演しています。それはなにもバラエティーに限ったことではないという所においてもすごいと言えるでしょう。しかし最近ではバラエティー番組やM1などの数多くのお笑い番組が終了しました。もはやテレビでお笑いをするだけではいけない時代が来た証ではないでしょうか。今後の吉本興業がどのような発展を遂げて行くのかが楽しみです。(日比)

自分自身、なんばグランド花月等の劇場に足を運んだことがないので、劇場の内部についての話がすごく面白かったです。個人的に、バラエティー番組の収録に観客として参加するのは女性の方が多いことが気になっています。base 吉本についての話でもあったように、男性の観客は一人という少なさでした。女性の方がミーハーが多いと言えば、それまでですが、男性と女性では「笑い」というエンターテイメントに対してのアプローチの仕方が違うのではないかと感じました。(百田)

高橋　義知

平成大合併の功罪　――篠山市と矢祭町を事例に――

2000 年から 2010 年までの 11 年間で日本地図は大きく変化した。政府が自治体同士の生き残る手段と銘打って市町村合併を勧告したからである。いわゆる「平成の大合併」だ。しかしながら合併をして良かったという意見がメディアを通じて耳に入ってくることは少ない。ではなぜこのような事態に陥ってしまったのだろうか。本論文ではこの疑問を出発点として、平成の大合併の功罪について論じている。

本稿ではまず明治・昭和に政府主導で実施された市町村合併の歴史について論じている。次に平成の大合併の特徴を明記し、いかにして市町村が合併へと扇動されたかについて論じた。そして過去の合併と今回の合併の共通点・相違点を見出した。

第 3 章以降では上記の事柄を参考に、篠山市・矢祭町を事例対象に設定してその現実を調査・考察した。結論として合併はマイナスの側面がプラスの側面を上回っているとしている。だが根本的な問題は少子高齢化や財政難など日本国が直面している問題に存在し、合併よりも大がかりな規模の対応が迫られているとも結論付けた。

［キーワード］市町村合併、地方分権、合併特例法

［相互批評］

市町村合併について、その歴史と特に平成の大合併の問題点を丹念に整理した読み応えのある論文だった。明治時代から、日本の行政は圧倒的に中央集権的なのだが、その組織は意外にスリムであり、反対に膨大な事務処理は地方に押しつけられてきた。いわば「金は出さぬが、口は出す」のである。しかし、少なくとも昭和まで中央は潤い、地方に回すポケットマネーもあった。平成になっていよいよ財政が苦しくなると、その形を地方に押しつけてきたのが「大合併」の真相であり、うまくいく道理もない。しかし、高齢社会は分権化をますます困難にしている。「国と地方」という発想自体が時代遅れなのだろう。(鵜飼)

合併についてのメリット、デメリットを明確に提示するだけでなく、データの違いはあるにしても、事例を紹介することで行政側と住民側の合併に対しての意識の違いも分かる。実際に合併した、もしくはする案が浮上していた市町村の住民、行政の声が紹介されていると、行政主導にならない、住民の声を拾うこれからの「無理のない政策」について考えていくことができるだろうと感じた。インタビュー調査とこれからの自治体が取り組むべき事柄（自治体の電子化や NPM など）と絡ませて、日本国の抱える問題というより、自治体という規模の小さいと

ころからの取り組みについて知っていきたいと思う。（大谷）

このゼミのなかで、唯一の地域社会学的な論文であった。篠山市と矢祭町という対照的な態度をとったものを取り上げることで、分かりやすい構成になっていた。最終的には、明確な決断を下せなかったのかもしれないが、このようなテーマでは、深く追求すればするほど、明確さは薄れていってしまうように思った。市町村合併の弊害などというものは、わずかではあれ、当然メリットとデメリットが発生することとなる。それら両方を見て、最終的な決断を下すことは極めて困難だろう。このテーマにおいて社会学の役割は、一般的には気づきにくい問題点の指摘や、問題点の原因の解明にとどまるだろう。（太田）

私自身、市町村合併を経験したこともなく、近隣でもそのようなことが起こったことがなかったためか、少し話しに入っていくのに時間がかかりました。やはり、国からの圧力によりそこに住む人の意見を無視してでも、合併してしまうという流れは、安易に変えることが出来ないということを痛感しました。合併するか否かの決定権を持つその地域の長には、地域という生き物を大切に、大切に育てて、そしてこれからを担っていくのが誰なのかということを熟考して続けていて欲しいと願うばかりです。（村井）

市町村合併という難しいテーマをより具体的に、詳しく調査していて、分かりやすい内容でした。合併することによるメリット、デメリットがそれぞれあって、どちらも一長一短であるため、どちらがいい、と結論付けてしまうのは難しい問題だな、と感じました。また、論文内では平成の大合併の際に合併した所としなかった所とのデータの比較などもなされていて、こういった数値化されたデータは見やすく、分かりやすかったので良かったと思います。（宮本）

都市部育ちで、市町村の合併とは縁遠い自分とは違い、実際に生まれ育った町の名前が消えてしまったという事実を受け入れざるを得なかった筆者の論文に対する情熱が伝わってくる論文だと感じた。市町村合併に際しての住民の感情の考察はそのような経験を経た高橋君ならではのものではないだろうか。筆者の感情についての記述はどうしても主観的な物が入りやすいもので、なおかつ感情は曖昧なものであるため、記述の持つ力が弱くなってしまうような印象を持っているが、この論文では初めに高橋君の経歴について軽く触れてあることでその点が解消されているように思える。ただ、高橋君ならどうしたいかということについてあとワン・パンチ欲しいと感じるところもある。（松原）

市町村の合併については、行政内部でよくも吟味せず、流行に乗ってしまった所も多いのか

なと感じています。合併により、公務員の方々の負担が大きくなるのではないでしょうか。市民の暮らしなどはあまり変わらないのかもしれませんが、地域ひとつひとつがしっかり頑張っていかなければいけないのだなと感じました。もう少し若い人びとが地域に興味を持たなければいけないと思いました。（近藤）

市町村合併についてその歴史からメリット・デメリット、事例研究と非常に丁寧に説明と分析・考察が加えられており、私としてもこのテーマに対する理解を深められたように思います。また、吸収合併された側の立場である高橋君にとってはぴったりのテーマだと思いました。ただ、事例研究にいたってはもう少し視野を広げ、功罪の功の部分を強調した、高い水準で市町村合併によるメリットを享受している事例を提示したほうが、次につながる魅力的な提案も可能であったように思います。（河本）

市町村合併をただ単にやっても、赤字同士の自治体ならば単に赤字に陥るだけですし、黒字の自治体はわざわざ赤字の自治体とくっつくこともあまりないと思います。僕自身は市町村合併によって、道州制を導入し大幅に国の権力を地方に分け与えれば、それぞれの道や州が独自のプランで地域経済を活性するのではないかと思います。またそのためにはそこに住む人々が積極的に地方政治に加われる仕組みが必要だと思います。（日比）

財政が厳しい地方公共団体がどうやって生き残っていけばいいかを、自分なりに考えた時、高橋君が述べていたようにNPOを優遇してうまく活用していくのは一つの方法だと思いました。年金にしてもそうですが、「公」と「私」の二つでは限界が来ていると思います。公共サービスにしても、どうしてもお金がかかります。そのため、NPO など「共」の部分をうまく活用して、できるだけ低コストで公共サービス等ができるように考えていかなければならないと思いました。（百田）

合併について、ひとつひとつ順を追って詳しく丁寧だったが、高橋くん自身の意見がもう少し知りたかった。細かいことではあるが、２章の１節に出てくる、リクルート事件や佐川急便事件は、読んでいてとても気になったので、詳しく書いて欲しかったと個人的に感じてしまった。合併によって税金などの負担が増えるとあったが、しかし一方で、職員や議員の人員削減でカットできる部分もあるように感じた。「合併は国家のために行われ、そこにある人間は無視されている」とあったが、ここでまさに高橋くんの経験を入れるともっと良くなったのではないかと感じた。合併を終えた現状を今後の道州制に広げたこと、合併のメリットとデメリットを篠山市や矢祭町に実際あてはめたことはとても読みやすく理解しやすかった。（山田）

大谷　卓史

大学キャンパスのイメージ　――同志社大学今出川キャンパス、立命館大学衣笠キャンパスでのフィールドワーク調査を通して――

現代の日本の大学キャンパスは郊外の巨大な敷地に移転することや、都市部での校舎の高層化が目立つ。その背景として少子化社会のなかで優秀な学生を取り合う大学の競合や、行政の積極的な誘致活動、産官連携のまちづくりなど様々である。そうした時代の流れにおいてキャンパス空間整備の見直しが盛んに行われてきた。結果として校舎やキャンパスといったハード面での拡張が目立ったが、学問の街として発展してきた京都も例外ではない。観光、伝統文化都市の中で成長してきたキャンパスを同志社大学今出川キャンパスと立命館大学衣笠キャンパスにスポットを当てて、フィールドワーク調査、インタビュー調査により、その空間構成を紹介し、学生が持つキャンパスのイメージ像と理想像を明確にしていく。そして、京都におけるこれからのキャンパス整備について考えていきたい。

［キーワード］大学、キャンパス、イメージ、空間

［相互批評］

著者は一貫して都市空間について研究を進めていたが、大学のキャンパスに焦点を絞って、都市空間との関係を考える方針にしたのが成功したと思う。また、海外や国内（特に京都）の大学キャンパスの形成を歴史的に調べるだけではなく、 現在の学生たちに何も見ないで自分の記憶だけでキャンパスマップを書いてもらい、それを見ながらインタビューをおこなうというユニークな方法をとったのも良かった。ただ、そこで学生たちがキャンパスの「息苦しさ」をしばしば訴えるのを読み、ずるずると定員を増して、建物だけを拡張してしまった日本の大学の都市空間的センスの欠落について考えさせられた。（鵜飼）

インタビューだけでなく、自分が抱くキャンパスのイメージを描いてもらうという方法が、特徴的だと思う。都市景観の問題は、ともすれば、対象が非常にあいまいになってしまう。またそのために、インタビューやアンケート調査を行いにくく、客観性が保たれにくいものである。しかし、大学のキャンパスという限定された対象を焦点に据えたことで、この問題点を解消していると思う。大学のキャンパスというものは、規模は小さいながらも非常に都市設計的要素が強いもので、その設計のそれぞれから意図がくみとりやすいものだと思う。そういう点でも、このテーマは、分析の対象に適していたと思う。（太田）

確かに、大学のキャンパスは小学校・中学校・高校と比較して外観に異様に固執しているなということは私自身も昔から疑問に思っていました。基本的に、関西では関関同立などの有名

私立大学が歴史と権力を誇示するため、それとは逆に全くの無名大学が校舎で学生を引き寄せるための手段として、キャンパスの外観が効果的に使用されている気がしていました。様々な変化を遂げてきた、京都のキャンパスですが、大都市に存在する非常に目立つ存在であるからこそ、その都市が常に求める形と、時代の変化に伴って学生が求める形の二つの交差点を考慮しながら変化し続けて欲しいです。（村井）

同志社大学と立命館大学という京都にある二つの大学に焦点があてられていて、まず親近感があり、読みやすい内容でした。そして、中身としては地図と写真などで視覚に訴える部分もあり、またフィールドワークを通じての具体的な内容、インタビュー調査など、論理的な部分だけでなく、そこにあるリアルな声、学生のキャンパスに対するイメージと希望などが記されており、文献だけでは得ることのできない情報が詳細にあって面白い内容でした。（宮本）

論述の流れが、海外（ヨーロッパ）の大学・日本の大学・同志社大学各キャンパスと立命館大学のキャンパスへと対象が絞られていく構造になっているので、一般論から個別論への流れのように理解しやすい話の流れだと思った。また、キャンパスに対して学生がどのようなイメージを持っているかを示した手書きのキャンパスの見取り図や、インタビューの内容など、街づくりにおいての大学と、学生にとっての大学との二つの事象について述べてあることは興味深かったが、それがきちんと最後にひとつの結論に向かわせているので、全体としてきちんとまとめてある論文という印象を受けた。（松原）

私が同志社を選んだ理由は「赤煉瓦の校舎がかっこいい」からです。街の風景の中に大学がある、そんな大学はそう多くないと思います。同志社の田辺キャンパス、東海大学の湘南キャンパスなど、その威圧感はすごく大きいです。けれども、後者が悪いというのではありません。学校を起点として街ができていく、それも大学としての大きな役割だと思いました。（近藤）

キャンパス空間の整備について、京都に存在する同志社と立命館の２つのキャンパスのイメージと理想像についてフィールドワークを含めた現状把握と考察は非常に興味深いものがありました。私自身は普段通いなれているせいであまり意識しないものの、論文を読んでいるうちに私が感じているキャンパスのイメージや理想と共通するものがありました。ただ、論文全体としてはキャンパスのイメージと理想像や現状把握に終始していて、結論としてはかねてから理想とされてきたものだけではなく、ある程度画期的な施策や方向性があるとより面白いものになったのではないかと思います。（河本）

図で載せられていた見取り図がもう少しあれば良かったと思います。キャンパスの形は昔と異なり変化してきていると思う。増え続ける生徒に合わせて、同志社大学でも次々に新校舎が建てられている。京田辺キャンパスのように京都市中心部にない大学を除いて、京都の大学は狭い敷地に詰めて建っている。そのため解放感溢れるキャンパス製作を実現することは極めて難しい。学生が思っているとおりにキャンパスは変わって行かないのだ。（日比）

同志社大学と立命館キャンパスの二つを対比させて論じているので、すごく分かりやすかった。また、この論文を読んでいて、大学のキャンパス空間が学生の大学内での過ごし方をある程度規定するのではないかと感じました。例えば、今出川キャンパスと京田辺キャンパスを比べた時、今出川は空間が狭いので、ゆっくり休憩できるようなスペースが無い。それに対して、京田辺キャンパスでは、開放的で広い空間があるので、学校でゆっくり休憩するスペースがある。自分が京田辺キャンパスにいた時を思い返してみると、特にやることがなくても大学内にいた記憶があります。しかし、今出川に来てからは、やることが無ければすぐに帰っています。こうした事から、キャンパス空間は学生の過ごし方に影響を与える大きな要因ではないかと思いました。（百田）

確かに、京田辺は学生街にはなっていないし、今出川もヨーロッパに比べるとあんまりである。キャンパスがその街の財産となれば一番良いのであろうが、そもそも日本と欧米諸国とでは、大学自体の捉え方、位置づけが違うのではないかと、私は論文を読んで感じた。実際の調査の中でも、学生自身も、アメリカのような、語り合い、分かち合うようなキャンパスライフではなく小ぢんまりさを求めていた。確かに、アメリカ青春映画に出てくる映画のような太陽のような輝きのイメージはない。ひとつ私が気になったのは、立地的にキャンパス内にコミュニケーション空間が必要ない環境である同志社を、“日本のキャンパス”として選んでいた点である。（山田）

東京と京都、日本でも大学が身近に感じやすい地域に住んだ大谷さんらしい観点で書かれた論文であり、構成や考察内容もよく、私個人としては非常に評価の高い論文である。付け加えるとするならば、信州大学の教育学部は善光寺の近隣にあり、長野市の中心部から見て北に位置している。このように大都市以外でも大学が街づくりの一端を担っている例はあるが、長野市のような地域では今後、企業跡地などの活用は見込めないと私は考える。ではそのような場合には今後新たに空間を活用していくにはどうすべきであろうか、という点を突き詰めていただけるとさらに質の高い論文になったのではないであろうか。（高橋）

太田　明人

6 要素のバランスからみた印象の構造について

個人的経験や背景との関連なしに強く印象付けられるものについて、ロシア・フォルマリズムの「異化」という概念をもとに、humor, melancholy, physiology, philosophy, metaphor, fact という 6 つの要素のバランスからその構造を分析した。まず〔第一章〕では、印象の形成と「異化」について、そして分析方法として 6 つの要素について論じた。〔第二章〕では、絵画では「ゲルニカ」と「モナリザ」を、文学では村上春樹の作品を分析し、そこに共通して見出せる 6 要素のバランスにつて説明している。最後の〔第三章〕では、分析によって得られた 6 要素と印象についての関係性についての結果から、この理論が日常生活にも適用できる可能性について示唆している。

［キーワード］印象、異化、ロシア・フォルマリズム、6 要素、バランス

［相互批評］

人はいろいろなことを経験し後に記憶として呼び出すわけだが、その際に強く印象に残ったことを手がかりに意識に浮かび上がらせる。著者はその手がかりを「フック」と名付けて、その構造を分析しようとする。読むうちに難解な文章が続くものの、現象学的社会学などの先行研究を考えると、案外、常識的な内容ではないかと思った。このような若気の至りは書かれてもいいとは思うが、社会学の論文として、他者との相互作用という視点が欠落しているのが何よりも気になった。(鵜飼)

芸術がテーマであり、恥かしながら芸術に疎いため「難解だなぁ」という印象を強く受けました。アートでも文学でも、６つの要素の相対性やバランスが美しいものには均等に取られているということが太田くんの分析により理解できました。やはり美とは、過度でも過小でも強すぎても弱すぎても保つことが出来ず、気を抜いていると通り過ぎてしまう様な中庸の中の「さりげなさ」が必要なのではないかと感じました。是非とも太田君には、芸術だけではなく社会における六要素の研究を続けてもらい、その論文を読んでみたいと思います。(村井)

率直な感想として、非常に難しい内容でした。非常に文学的な要素が強く感じられ、太田君の個性が強く感じられる論文だと感じました。そういった意味では面白く、彼なりの持論が展開されていたため、絵画や文学作品に対して、太田君オリジナルの見解がなされていて、新しい展開の論文だな、と感じました。(宮本)

まず何を問題にしたいのかがわからない・・・これは自分の読解能力の不足のせいもあるだ

ろうが、人の意識の中に印象を与える際に六要素が重要な役割を果たすということなのだろうか。どちらにせよ六要素を用いての分析をする際に、絵画の絵を有名だからといって載せないのはもったいない。むしろ、載せないとその分析や説明に説得力が無いように感じられるし、最後の締めくくりにおいてももっと書きたいことがあると思わせるところから、もう少し時間をかけた真の完成品を読みたいと思った。（松原）

村上春樹、モナリザなど、太田君らしいなと思いました。正直少し難しい内容でした。（近藤）

論文で示そうとしていることはなんとなく理解できますが、いささか論の運びに無理があるように思いました。また、6 要素バランスを取り上げた根拠やそれぞれの要素を作品に当てはめて数値化する意味、例示している作品の選定基準などについては客観性を欠き、曖昧模糊としたものとなっていたので、読んでいる側としては疑問符がつくところでした。印象論として成立させるならばもっと研究する対象を限定して、ある程度の枠組みのなかですれば、難解なテーマではありますが、読み応えのある論文になったのではないかと思います。（河本）

すいません、僕があまり理解できていないのですが、調査方法というかアイディアがとても面白かったと思います。独自に６つの要素を取り上げ、それについて考察するというスタイルは見たことがなく、新鮮でした。対象数こそ少なかったものの、複数の別の比較対象を出して、比較研究をされていたのもとても興味深かったです。本来語りたかったであろう、それぞれの社会大系と６つの要素のバランスの関係性についても読んでみたかったです。（日比）

６要素について、各要素のレベルを決める基準が曖昧で客観的でない点に問題があると思いました。また文学の論文を読んでいるような気がしました。正直、よく分からなかったのですが、6 要素のバランスがとれているものが、人々の印象に残りやすいという事なのでしょうか。異化という概念については理解したのですが、最終的に何が言いたいのかよく分からなかったので、「コメントに困る」という事を太田君の論文のコメントにしておきます。（百田）

異化と記憶を実際に分析した論文ということで、最初の理論の説明は抽象的で難しくなかなか分からなかったが、実際の事例研究を読むと、今までこのような見方をしたことがなかったので、非常に興味深かった。モナリザにおける異化は面白く、何の要素がなくてもバランスを保っており、極端だからこそ印象に残るというのには納得させられた。この異化の対象となる“芸術作品”とはどこまで入るのかが非常に気になった。音楽もそうなのか、もっと私たちの日常的な、例えば記憶に残る面白いお笑いのネタ作りにも、この６つの要素にあてはめれば良

いのだろうかと考えてしまいました。（山田）

印象が異化する原因を６要素で分析を試みた論文のように感じられたが、正直私にとっては専門的というか理論学的な印象を受け、社会学の論文とは感じられなかった。また分析方法に関しても６要素の定義から自己の判断基準によって分析をしているようだが、その定義に関しても少し曖昧ではなかろうか。６要素そのものが抽象的な基準で存在する以上、読み手にも理解しやすい判断基準を設け、さらに対象数も増やすことができたならばより質の高い論文に仕上がったと思う。（高橋）

日常生活における印象や記憶（異化）と印象を構成する 6 要素について、これまでの自分自身の心にのこったことを振り返ってみると、それらが組み合わさっているように思える。感覚として共感する箇所も多いが、これら印象については多数の人々に調査をしてみなければ結論づけることも難しいと思えた。個人的には印象の構成とは具体的なもの（人物、作品、空間、音など）を五感で感じ、お互いが刺激しあって残るものであると考えている。そしてその中に６要素が含まれているのであろうが、それを日常生活のなかで意識し証明することについて明確な判断基準は設けられないし、難しいと感じている。（大谷）

村井　唯

ダンスを媒介にしたコミュニティの役割
――クラブ・ワークショップ・スポーツ応援を踏まえて――

第 1 章ではダンスの歴史的背景と変遷、またダンスと共にテーマとして挙げたコミュニティの定義を行った上で、ダンスの社会的役割を論じる。その具体例として、元々型に決まった観客に見せるための踊りしか知らなかった私自身のダンスにおける認識が 180 度変化したであろう、クラブハウスの歴史的変遷を述べる。そして、熱狂的なクラウドとしてのダンスに興じる人々の中における、一晩限りのコミュニティ形成について述べる。第 2 章では、上記の私自身の実体験に基づいて、同志社大学で開催されたダンスワークショップの記録と、考察を行う。そして第 3 章では、現在私が所属している bj リーグ京都ハンナリーズのチアリーダーとしての活動を通して、同じチームを応援するという共通意識を持って集合した集団が、BGM に乗せ同じ動作を行う上で形成されるコミュニティに着目する。そして最後に第 4 章では、これら広義から狭義までのダンスに秘められたコミュニティ形成としての役割と、これからのダンスの可能性について論じる。

［キーワード］ダンス、コミュニティ、ノンバーバル、熱狂、コミュニケーション

［相互批評］

毎年でもないのだが、チアラーからよさこいまで、ダンス（踊り）をテーマにした卒論によく出会う。しかしこの著者は、フラダンスのサークルで活躍しているかと思えば、障害をもつ人たちとのダンスワークショップに取り組み、あるいは bj リーグというプロバスケットチームのチアもやっていて、とにかく「マルチ・ダンサー」なのである。そんないろいろなテーマをどうまとめるのだろうかと思っていたら、「コミュニティ」というではないか。社会学もやっているのだなと、うれしかった。（鵜飼）

クラブでの経験やワークショップを通しての経験など、彼女自身が大学生活を通じて感じ、得てきた事が数多く記述されていて、興味深い内容でした。今までのダンスのイメージとして、単にパフォーマンスとしてのイメージが自分のなかで強くあったのですが、この論文内ではむしろダンスがひとつのコミュニケーションツールとしてとらえられていて、そのダンスを通じて、人々がどのように関わり合っていけるのか、といったダンスの持つ魅力、可能性が興味深く、面白く読むことができました。（宮本）

ダンスについての記述を 3 つもしくは 4 つのタイプに分類して進め、それぞれの歴史や科学的な見地での考察が良くされていると思うが、最後のまとめの部分は少し文章自体が弱い気が

する。読んでいてダンスについて興味がわくような記述も見られ、読みやすい文ではあるが、読み終わった後に頭の中が今一つ釈然としない感覚があるのは、村井さんがどうしたいのかという考えが伝わってこないからなのかもしれないと思った（松原）

自らの経験を踏まえており、とてもおもしろかったです。ダンスがコミュニティを作る、映画 ET で、ET が人間の男の子の身振り手振りを真似してその警戒心を解くというシーンがあります。ダンスもこれと同じで、ひとつのコミュニケーションツールなのだと感じました。ダンスにもいろいろなものがあります。例えば競技としてのダンス。フィギュアスケートを例に出すと同じスケートという部類でもアイスショーと競技フィギュアではその意味は大きく違います。そこらへんを詳しく書いてもよかったと思います。（近藤）

ダンスによるコミュニティ形成やダンスの可能性というテーマは少し漠然としていて、取り扱うテーマとしては範囲が広すぎるのではないかという印象を受けました。村井さんはダンスのワークショップ、bj リーグでのチアリーダーとして貴重な経験をされているので、そこでの内容を主眼においたテーマであればまとまりのある論文になったかと思います。しかし書いている内容を通してみると、ダンスをライフワークとしている村井さんが伝えようとしていることは分かる論文になっていました。（河本）

ディスコやクラブに行ったことがなく、自分自身もあまりダンスを嗜まないのでよくわからないが、社交ダンスにしてもどんなダンスにしてもダンスを嗜まない人にとってはどこか遠いもののように感じます。クラブなどのダンスは誰でもリズムにのって踊ることができるかもしれませんが、そもそも「クラブに行って踊ろう！」と思うことが少ないです。見る人の多くをダンスは魅了すると思います。しかし、それを実際やってみようと思う人の中でのコミュニティはよく形成されているかもしれませんが、良いかは別として見ている人をも巻き込むことはなかなかできていないと思います。（日比）

これからのダンスの可能性について、もっと具体的な言及があれば良かったと思います。自分もクラブに行ったことがあるのですが、たしかに異質な空間であると感じました。クラブ内で薬物が売買されている事も少なくないと聞いているので、個人的には、そういった異質な空間であるために生じる負の側面についての言及があれば面白いかなと思いました。また、DJ によってオーディエンスの盛り上がり方が違う事を自身の経験として感じていたので、DJ を、祭りを取り仕切るシャーマンに例えたことには妙に納得しました。（百田）

クラブにしてもバスケットの体育館にしても、そこに帰ってきたという帰属意識があるのは確かに宗教に似ていると感じた、しかし一方で、クラブは宗教のように閉鎖的ではなく、新しい世界に出ていきたい、つながりたいという部分も感じられた。安心感と同時に、未知なるものへの挑戦のような、そんな側面も見てとれた。クラブでは「彼らの中の一人」という気持ちが生まれるとあったが、傍から見れば意思疎通というより、その場を楽しむだけの感じが強いように感じるが、その辺の実際の村井さんの意見が気になった。また、今後ダンスは見るものではなく、するものとして生かしていくというのが村井さんの結論だったのかも、知りたかった。（山田）

ダンスが担うコミュニティ形成についての論文であると私は解釈したが、例示が３つあるために比較と共通を見出すのが難しかったのではないだろうか。論文のテーマとしては興味深く、また読み手としても初見の人間にも分かりやすい構成になっている。だが３つの例示から導きだした共通点についての本人の考えは記述されているが、そこで論文が終結しているため「だから？」という感情が生まれたことも事実である。そのダンスコミュニティをどのように生かしていくかといった今後の展望など、もう少し結論部に深みを持たせるとさらに良い論文になったのではないかと私は思う。（高橋）

筆者自身の経験からダンスが他者との直接的なコミュニケーションから、他者だけでなく自身の内面において再考させられるものであることがわかった。ダンスを通じて形成されるコミュニティには必ず、ダンス以外に様々な、感情を高ぶらせる要因が詰まった空間が存在し、それとダンスが結びつく様子が分かりやすく、スポーツ試合の会場や音楽やイベントのライブ会場などこれまで読者である自分自身の体験と結びつけて読み進めることができた。（大谷）

自分の経験談をからめた面白い論文だったと思う。ダンスを一種のトランス状態のようにしておきながらも、その場では、皆がその場を作り上げるという、社会的行為がなされているという部分が興味深かった。そこで起こる、それぞれの人びとの心理を自分の経験談や、インタビューなどでもっと詳しく知ってみたいと思った。この論文で、僕の知らない情報が多く知ることができたと思う。それは、この論文が基本的に、読む人のことを考えて、分かりやすい構成となっていたことが大きく関係しているだろう。（太田）

宮本　知明

遊びの変化とその影響　――遊ぶ子どもから遊ばされる子どもへ――

遊ぶ行為に対し、ある定義付けを行ったロジェ・カイヨワ。本稿では、彼の言葉をかりながら、戦時中の日本から現在に至るまで、子ども達の遊びがどのように変化してきたのかを探る。遊びの変化を追うと共に、公園での遊びとは何か、おもちゃを使っての遊びとは何か、を探る。そして、ファミコンの発売以来、テレビゲームが遊びの世界へと登場することで大きく変化した子ども達の遊びの風景、その流行の背景と子ども達に与えてきた影響を考え、遊びとしてのテレビゲームを考える。

大きく移り変わってきた遊びと子ども達の様子を探り、それぞれの特徴を掴み、そしてそれらを比較し、真の遊びとは何かを探り、戦後日本の公園遊びを参考に、今後日本の遊びの在り方を考える。

［キーワード］遊び、ファミコン、コミュニケーション

［相互批評］

著者は大学生活をつうじて子どもと遊びながら音楽を演奏するサークル活動をしていて、そんな感覚が随所に顔をだしているのだが、何とも不器用というか、まとまりの悪い論文だった（苦笑）。この著書のいいたいことは遊びそのものというよりも、子どもの遊びと病気、あるいは遊びと治療といった境界領域にあるようだ。たしかに子どもは実はいつも病気がちだったり精神的に不安定だったりする。そんな視点から遊びを考えようとしているのは、さすがだと思った。（鵜飼）

論文中に登場する遊びやおもちゃの大半が、自分がかつて熱狂したものであり、かつテレビゲームについての考察もなされていることで非常に興味をもってあっという間に読めてしまう反面。自分が行ってきた遊びというものが科学的に考えるとどのようなものかを見ているようで自分を実験・観察する感覚という不思議なものを感じた。自律的に遊ぶことと作られた者により受動的に遊ばされるという考えは、うなずける部分も大きかった。（松原）

インドのある男の子は、９歳にして医学部に入学できるほどの学力があるのにもかかわらず、IQ のテストでは他の子どもより成績が悪かったそうです。原因は子どもが遊びの中で培っていく能力が欠如しているとの記事を読んだことがあります。遊びは子ども達にとって大きな影響力を及ぼしているのだなと感じました。鬼ごっこやかくれんぼなど昔ながらの遊びのなかにはルールがあります。子ども達は遊びの中で社会を学んでいくのではないでしょうか。（近藤）

宮本君のサークル活動での経験や遊びについても考えが豊富に盛り込まれた論文でした。構成として、遊びに関する具体例が多く、遊びの状況を理解するには役立つのですが、全体として、いまいち内容がちぐはぐな印象を受けました。テレビゲームの登場によって子供たちの遊びが一変したことは事実ですが、ゲーム自体の性質のほかに、現代特有の社会情勢の影響もかなり大きいはずなので、その観点からの分析が入ると、もう少ししまりのある論文になったのではないかと思います。（河本）

遊びといっても色々あると思います。文中で述べられているテレビゲームは近年の遊びの手段としてとても親しまれているものです。近年ではこのテレビゲームのしすぎで暴力的になっているだとか、コミュニケーションする機会が減っているなどとささやかれていますが、書かれている通りとり越し苦労だと思います。テレビゲームそのものが人間の暴力性やコミュニケーション機会の減少に直接かかわりがあるとは思えません。確かに一因にはなっているかもしれませんが、短絡的に考えて今話題のマンガの規制のように規制をかけるのはどうかと思います。（日比）

あまり難しい事が書かれていなかったので、読みやすかったです。しかし、これからの遊びの在り方について、詳しく言及されていないので正直よく分からなかった。戦後の遊びを理想の遊びとしている事から推察すると、宮本君は、おそらく、子供の社会化という観点から、テレビゲーム等の受動的な遊びが蔓延した現状を危惧しており、子供が能動的で想像的な遊びができるような環境や物を作っていく必要がある、という事を言いたいのだろうなと思いました。（百田）

遊びの変化ということで、やはりテレビゲームの内容があったが、これはゲームやコンピューターで遊ぶ子、遊ばない子と、子どもの多様性、遊びの多様性がある中での、ゲームという一部の話であって、これが全ての子どもではないという記述も必要なのではないかと感じた。また、対人関係の障害という話もあったが、単に大人の責任というだけではなく、それは子どもが求めたからそうなったのか、社会がそうなったから子どももそうなったのか、そこももっと深めれば面白いのではないかと感じた。遊びが変化した中で、その子どもたちが大人になった時、社会はどう変化するのか、今後についても気になった。子どもというのは調査が難しいと思うが、実際に宮本くんが子どもと色々な遊びをして感じた子どもの性質や、その子の実際の生い立ちや将来の夢なども織り交ぜて描けばより社会学的になったのではないかと思った。（山田）

「遊び」をテーマに設定し、実体験を踏まえながら書き上げた論文であるが、その経験やサークルを通じた参与観察が生かされていないと感じる。本稿では筆者の実体験が生かしきれず参考文献に頼った論文に仕上がっていることが残念だ。また最終章の考察の部分を読み返してもそれまでの序章から第３章までの中で記載されたことを繰り返し述べているだけなので、筆者の序論で感じた疑問点を解決するだけで終わるのではなく、自分の考えやこれからの遊びの生かされる道などさらに深めていくべきではなかったのではないだろうか。（高橋）

戦後の遊びが子どもたちに社会性を身につけさせ、メディアなどによるとそうした遊びが「良い遊び」としコンピューターゲームが「悪い遊び」とされてしまいがちであるが、実際にはコンピューターゲームを媒介とした他者との関わり方を子どもが学んでいく姿が本論で紹介されている。二つの決定的な違いは自由にルールを取り決められる子どもが遊びに対して持つ自由度であるように思える。しかし、結びの言葉にある通り、コンピューターゲームには自由度が少ないかもしれないが、他者と関わるツールとして、他者との繋がりを生む突破口のような役割も担っていることが分かる。遊びに見られる、子どもたちの独特のアレンジの仕方と大人が子どもたちに人と関わるツールとして与える意図との違いをより詳しく掘り下げて知りたいと思った。（大谷）

宮本君の論文は、テレビゲームのみでなく、子供の遊び全般にわたって論じていた。遊びという媒介を通じて、子供の関係性の変化をたどる方法により、社会学として成立していたと思う。子供の遊びの変化というものは確かに、僕自身実感することがここ最近多くなってきた。屋外で携帯ゲーム機を集団でする子供の姿(大人も見受けられるのだが)を頻繁に見るようになると、僕たちの世代が、そのような遊びと、昔ながらの遊びが、「自然」に混在していた世代のように思える。それゆえに、われわれならではの視点でこのテーマに対してアプローチすることができると思う。（太田）

宮本君のサークルでの経験や、自分自身の幼い頃からの遊びについて言及されていた点が、とても興味深かったです。やはりその部分の記述は、とても活き活きしていた様に感じられました。その一方で、書籍からの引用や説明がやや多い印象を受けたことが残念でした。高校の頃から立ち上げたサークルがあるのであれば、より多くの子ども達の生の声を聞いてきたのだろうと思うし、また自身が子ども達と触れ合うことで感じたこともあると思うので、それを更に詳しく記述して欲しかったと思いました。（村井）

松原　直輝

武道のスポーツ化の影　――空手道における「武道性」の喪失――

日本には中世以前から伝わる「武道」というものがあるが、現在我々が知っている武道というものは、昔から変わらず伝承されたものではない。それは明治時代の文明開化から始まる日本社会の大きな変革により近代化されていく社会へと相応しい形に変えて今日まで残ってきているのである。現在の「武道」は、近代化を施されたかつての「武術」が姿を変えたものであって、武術に比べてスポーツ化された一面を持つ。

空手道においてもその例外ではなく、今彼らはそのスポーツ化された空手の試合のために稽古をするようになり、特にフルコンタクト空手の分野においてその傾向は顕著である。スポーツ化を押し進めることによって多くの人が武道に挑戦するようになり、その規模も大きくなるが、スポーツ化された中での試合の内容と実践との間に大きな隔たりが生じ始め、空手は本来の目的である武道性の追求・実戦において護身のためのものという存在意義を失いかけており、もう一度武道を日本の身体文化として再認識する必要がある。

［キーワード］スポーツ化、武道性、フルコンタクト空手、実戦、試合

［相互批評］

柔道を典型に日本の武術は近代化の中で武道に姿を変え、いわばスポーツ化することで世界に受け入れられるようになった。中国武術が沖縄に伝わって完成された空手は、本土でも普及してスポーツ化するものの、柔道のような組織化、流派の統一化に失敗し、近年はむしろ本来の実戦性や技を重視する方向に回帰しつつあるという。著者はもともとグローバル化に関心をもっていたが、自分がいつも稽古している空手について研究することで、スポーツの近代化やグローバル化の両義性を発見するにいたったわけで、読んでいてとても興味深い研究になったと思う。（鵜飼）

空手は日本人がよく知っているはずのスポーツなのに、マイナースポーツの部類に入るのではないでしょうか。理由としては、「観客に見せる」という取り組みをしていないからだと思いました。柔道やテコンドーなどは、その「見せる」ということを上手く取り入れています。柔道の「一本！」などは、見ていて気持ちがいいものです。もし、空手を全国・世界的に広めたいのであれば、ルールの改定は絶対に必要だと思います。（近藤）

武道の近代化とスポーツ化について空手をメインテーマに冒頭から丁寧に書きあげられて、松原君の熱心さが伝わってきました。ただ、内容のほとんどが歴史的事実をたどっている面が強く、論としてもう少し工夫があるといいな、と感じました。師範と師範代へのインタビュー

の箇所も生の声をもっとふんだんに盛り込むことによって、歴史的事実をたどって見えるものとはまた違う観点での論が展開できたのではないか、ということを鑑みると少しもったいないように思えました。（河本）

柔道や相撲などが最近外国人に席巻されているのは言うまでもないと思います。文中でも触れられている通り、「勝つための方法」ばかり考えられるようになり、そこに礼や信念といったものがきちんとあるのか疑問に思うことが度々あります。スポーツでもただ強いものが良いという価値観のみで判断し続けるのは良くないと思います。今一度、本来あったものをきちんと確認してスポーツに取り組むべきだと思います。外国人が相撲や柔道などの日本伝統の武道に触れてくれるのは嬉しいですが、その心まで理解して取り組んで欲しいと思います。（日比）

武道のスポーツ化は時代の流れとして仕方ないのではないかと思いました。なぜなら、昔と違って、自分の身は自分で守るという意識が薄れてきているからです。その一因として、警察などの治安を守る機関の出現も挙げられると思います。論文の内容的な面では、武道を文化の一つとして考えた時、スポーツ化した武術を本来の目的である護身というものにどうやって戻していくのか、この点について松原君なりの意見があれば、もっと面白い論文になると思いました。（百田）

武道というものが、時代の流れや歴史の中で葛藤し、変化してきたという事実の記述は面白かった。一見、スポーツ化は庶民的になるし、広く競技されるという点で良いのではないかと感じていたが、そうでもないようだということも知った。他のスポーツと違い、特に技は精神の鍛錬となること、また年齢に応じて手法を変えられる点にも興味を持った。実際に松原くんが空手という武道に属して感じること、また松原くん自身はこれから実践するスポーツとしてどう付き合っていくかなど気になった。もっとインタビューの部分を要約ではなく、インタビューらしく書けば良かったのではないかと思った。（山田）

武道のスポーツ化について論文を書き上げる以上、歴史的背景に触れることは重要なことであるが、その歴史に重点が置かれすぎて肝心な部分（本稿ではスポーツとの兼ね合い）に関しては、私自身の空手に対する無知も相まってか筆者自身の感想が多く記述されているようにも感じた。だが扱ったテーマ自体は非常に興味深いものである。本稿における「終わり」の部分で今一度各章ごとに書かれていた筆者自身の考えをまとめ上げていただけると、読み手としても、また論文としてもスッキリとしたものになったのではないだろうか。（高橋）

武道のスポーツ化についてまとめられており、これまで武道と体育の授業でしか関わりを持たなかった私にもスポーツエンターテイメントとなった様子がよく分かった。武道の始まりは相手を倒すことにあったにしろ、日本の文化としてその中に「技」という相手を魅せるものが存在していた。これが相手を倒すことを前面に出すスポーツ化・近代化（私はエンターテイメント化と考える）していく中で喪失されたことが武道としての魅力も削ぎ落としてきたように思われる。そうした日本文化の世界進出の中で、人に対して演じることが継承の形と知り、演じられた武道と近代化された武道の今後の取り組みについて当事者である師範たちのインタビューが興味深かった。（大谷）

個人的にも興味があるだけでなく、非常にユニークなテーマであったために面白く読むことができた。この論文は日本の伝統が海外にも流通可能な「コンテンツ」となる変化を追っていったものだと思う。「伝統」という旧来のものが「コンテンツ」という現代もっともモダンなものへと変化した経緯が面白い。このテーマの武道は、日本の伝統や文化をコンテンツとして発信し、スポーツという国際的な基準に適応している。これは日本の今後を考えるにあたってもクリティカルな問題でもあるために、もっと広がりを持つ可能性のあるテーマだと思う。（太田）

最終的に、空手だけでなくその他の日本の伝統的な格闘技においても、技が消失しているという面が否めないということに驚き、また納得しました。確かに、あまり格闘技に興味関心のない私でさえも、柔道や相撲をテレビで見るたびに「日本の国技なのに、なぜ外国人ばかりが活躍し注目されているのだろう」という疑問を持ち続けていました。それは、日本らしさである「技」の部分が消滅し、身体能力を前面に押し出していくといった時代の流れがあるのだと、理解できました。しかし、それをもう一度技主体に戻すには、どのような取り組みが必要かをより深く考察出来ると良いと思います。（村井）

現代では、Ｋ－１などに代表されるように一種のショースポーツとして浸透している空手の本来あった武術という姿を取り戻すべく、ショースポーツとしての空手に対して疑問を投げかけられていて、とても興味深い内容でした。あまり知る機会のない空手という武道の歴史が詳細に述べられており、理解しやすい内容でした。本来の空手道の持つ、武道性の追求、そして護身用という目的を失いかけている空手界に待ったをかけ、一つの武道、そして文化としての空手を見直す機会となる論文だと感じました。（宮本）

近藤　千紗子

「枚方宿地区まちづくり」の課題と展望　――主体的市民活動に対する一考察――

近年、「まちづくり」という言葉をよく耳にする。「まちづくり」に関するさまざまな条例が制定され、数多くのNPO団体が設立されている。けれども、「まちづくり」といっても、その意味は様々である。では、「まちづくり」とは何を指し、何を目指しているのであろうか。多義的な意味のある「まちづくり」を、大阪府枚方市に位置し江戸時代に東海道の五十六次目の宿場町として栄えた「枚方宿地区」のまちづくりの事例を通して考察した。地域社会・地域環境・地域経済を「まちづくり要素の３角形」とし、この３つの観点から、行政の取り組み、市が制定した「枚方市都市景観形成要綱」、NPO 団体「枚方宿地区まちづくり協議会」によって締結された「まちづくり協定」、また枚方宿で行われている様々なイベントを通して、市民によるまちづくりの仕組みとまちづくりと地域活性化の関わりについて述べた。

［キーワード］枚方宿、まちづくり、市民主体、生涯学習、まちづくり要素の３角形

［相互批評］

東海道五十三次というが、さらに大阪まで街道が続き、枚方で五十六次だったとは知らなかった。たしかに淀川を船に乗って京都と大阪を往き来する光景は古典落語でもおなじみである。そのような「枚方宿」の歴史を活かしたまちづくりの研究であるが、論文後半部分の肝心のまちづくりの部分で、どのように歴史が活かされるのか、あまり述べられていないのは残念だった。地域通貨など興味深い論点が多く紹介されているので、ひとつでも掘り下げた分析があればと悔やまれる。(鵜飼)

まちづくりをするにあたって、単に歴史的建造物やイベントに依存するのではなく、やはりそこに根付く住民たちのコミュニティ意識があって初めて働くようになるのだな、と思いました。ただ、論文を読んでいて、いったい「まちづくり」とはどうすることをいうのかよく理解できませんでした。そこに住む人々のコミュニティを強化することなのか、そのまち自体を活性化させることなのか。そのあたりの認識がまだ世間に共有されていないことがそもそもの問題としてあり、まずはまちづくりの基礎を市民に根付かせようとする市の取り組みはある程度必要なのだと思いました。(河本)

枚方市のまちづくりにおいて行政が市民活動を制度的に保障できていないと書かれていたと思いますが、行政はどこまで踏み込むべきなのでしょうか。まちづくりの本質は行政よりも市民が主体的になって行わなければ意味がないと思います。どんなに制度的に恵まれてようと、それをちゃんと使う市民あってのものではないでしょうか。市民が主体的となって、行政はそ

れのサポートをすればいいのだと思います。逆に言えば、市民にそれだけのエネルギーと活力がなければまちづくりなんて幻想に終わってしまう気もします。（日比）

枚方市のまちづくりについての考察から、何が言いたいのかよく分からなかったです。考察だけで終わっている気がしました。唯一、地域発信で市民が主体的にまちづくりをしていかなければならないという事は分かりました。枚方市のまちづくりを考察して分かった事（総合的に見て、まちづくりが失敗であったなら、その要因等）、これからのまちづくりの在り方等、具体的に、近藤さんなりの考えを交えた記述があれば、もっと良かったと思います。（百田）

私の感じる枚方市のイメージは、枚方の人は枚方が好きだということ、それは枚方が住みやすい土地であるからと同時に、人々が枚方を好きだから住みやすくしたいという思いがあるのだろうな、と感じていた。実際のまちづくり計画に沿ってまちづくりが出来ている、その所以は何なのか、とても気になった。実際に近藤さんが住んでいるということなので、インタビュー調査や経験・体験を語れば、枚方市のまちづくりがより身近なものになったのではないかと思った。まちづくりのダメだった点を改善する策を講じていたのは良かったと思う。枚方市は住みやすいまちづくりに加え、観光地としてもやっていきたいということで、何かまちづくりについて考えさせられる論文だった。（山田）

同じようなテーマを扱った私としては関心を引く論文であった。枚方の町について細かく調べあげていると思う。今後の展望や自分なりの考えも論文に組み込まれており、良い論文ではないだろうか。しかし同じような論文を書き上げた者から言わせていただければ、まちづくりをテーマに扱った場合に登場してくる語句や背景などは、意外と知られていないものである。本稿では文中で脚注が一切記載されておらず、その点では初見の人には共感が得にくかったのではないかと感じる。やはり論文を書き上げるまでの時間配分（予定立て）の失敗が響いたのではないか。（高橋）

まちづくりについて地域環境、地域経済、地域社会の三要素から枚方市における住民主体の活動を取り上げ考察している。まちづくりの最大の課題であり、目標は人がその街を愛し、留まることであることが分かる。もともと宿場町として栄えた枚方は人を留めさせておくほどの魅力を備えているということで、住民達は街の外からやってくる人々に対して観光施設などハード面での整備、住民達に対してはサービス面の整備で街に惹きつけようという試みが分かる。しかし、こうした住民の活動も行政側のバックアップが不足しているとし、まちづくりの成功に結び付かないとしている。他地域でのまちづくりと比較し考察してみると、より深く枚方市

における行政、住民の取り組みについての今後も考えられるのではないだろうか。（大谷）

近藤さんの卒業論文を読んで、まず現在の日本の都市環境はそれなりの必然性を持ってつくられたものであるように思えた。その場所で生まれ育った人が、全く違う都市の姿を理想にして実際に作り替えていくということは起こり得ない、つまり不自然であるように感じたのである。理想的な「まちづくり」をうたう人は、都市環境の変化ばかりか(たいていその理想は映画や写真によって抱かれたイメージにすぎないのだが)経済的な変化まで求めるのである。近藤さんの論文はそのようなものでなく、人と生活に主眼を置いていた点が良かったと思う。（太田）

一つの枚方という地域に、絞って研究をしていたので軸があまりぶれず読みやすい卒論でした。枚方市は地域の歴史を継承し、また地域を活性化させ続けるために本当に様々なイベントを行っており、その双方向からの努力に感銘を受けました。そのイベントが一部の人々から発信されるのではなく、地域の住人一人一人から自主的に発信されるためには、一体どのような住民への呼びかけが必要とされているのかという所まで、近藤さんには言及して欲しかったと思います。（村井）

街づくりというテーマを扱われたこの論文では、枚方という都市に焦点をあて、その街づくりの歴史や、現在そこに関わる行政や団体などに関しての調査がされていました。行政の行う街づくり、そして市民主体となって行われる街づくり、そこの間に生まれるギャップなど、順を追って記述されていて、理解しやすい内容でした。また、地域活性化としてのまちづくりとして枚方で行われている様々なイベントなども紹介されており、より具体性の増した内容になっていると感じました。（宮本）

最後の結論の部分で引用を使うのがもったいないとともに近藤さん自身の考えを自身の言葉で書きつづってほしかった。問題を提起した後に、どうしたら解決するのかという記述がもっと増えると文自体の論理構成がまとまると思う。また、まちづくりについての記述の中で、そのどの点が問題であるかが、あまり明確ではないので話の主題が見えにくかったのも事実。枚方市のまちづくりの変遷についても事実が述べられているにとどまっているので、ところどころに近藤さんの考えを差し込むと「らしさ」が強く出た個性のある論文になると思った。（松原）

河本　廣徳

有名人のメディア露出とツイッター活用の関連　――ツイート分析を通して――

日本では2009年ごろから爆発的なまでの勢いでツイッターが大流行している。その勢いはこの現在でもとどまることを知らない。ユーザー数ではすでに1000万人を超えている。そのなかには一般人のほか、有名人・著名人の姿も多い。フォロワー数の多さという尺度で見た場合、その上位にいるのはお笑い芸人や歌手・ミュージシャンのように、ほとんどがテレビを中心としたメディアでよく見知っている人物である。だが、対照的に声優、漫画家のようにメディアの露出は極端に少ないはずの有名人も多くのフォロワーを獲得しているということが分かった。いったいこの差はメディア露出とどのように関連しているのか。それによってツイッターの活用状況は変化しているのか。この着想をもとに本稿ではツイッターで上に挙げた 4 つの職業に属する計60名の有名人のツイートを量的・質的な観点から分析を加え、考察を深めていき、ツイッターの可能性を見出していくものである。

［キーワード］ツイッター、有名人、メディア露出、コミュニケーション、リアルタイム性

［相互批評］

ツイッターというとらえどころのないメディアについて、著者はきちんと社会学的な方法論に則って分析をおこなっており、まずその点にたいへん好感を持った。その上で、メディアへの露出が少ない声優や漫画家がなぜ多くのフォロワーを獲得するのかについて考察を進め、その専門性ゆえに関心を共有するフォロワーが集まりやすいツイッターの特性に注目しているところが良かった。ただし、もう少し個別のケースについて掘り下げた分析もあればさらにレベルが上がったと思う。（鵜飼）

ツイッターという最近流行のものをテーマに扱っていて非常に興味深く、研究方法も独自に考えられていて、とても面白かったです。質的・量的両方の側面から調べられていたのもとても良かったと思う。ツイッターに関しては最近生まれたものなので、これからどのように変化してゆくかまだわからないが、これまでのmixiやblogとは一線を画して発展していくのではないかと僕自身も感じます。ただ、日本におけるツイッターは海外のそれとは違った使われ方や発展がみられるのではないかとも思います。（日比）

自分自身、ツイッターをやっていないので、具体的にどのようなものかイメージするのが難しかったですが、特定のツイッターユーザー一人一人に着目して分析していくのは、地道な作業ですごく大変だったろうなと感じました。また、ツイッターをビジネスの手段として活用している人がいたり、ツイッターの特性をうまく利用している人たちがいるということに驚きま

した。ミクシィ等はある程度使い方が限られているけれども、ツイッターは、その特性上、使い方が幅広くある。こういった点が非常に興味深かったです。（百田）

メディアとツイッターの関連性ということで実際のツイート調査が中心の論文で序盤は面白く読めた。ただ結論のところ、ツイッターとメディアの関係は、お笑いタレントのツイッターの利用の仕方や、芸能人がツイッターをしているから一般人もツイッターをしているということ、歌手がメディアに露出しないから逆にフォロワーが多いと、このくらいしかなかったように読んでいて感じた。声優は閉鎖的であり、漫画家はメディアに関係なく幅広い使い方をしていた。読み終わって感じたことは、結局メディアとツイッターは関連性があったようななかったような、？がつくような感じだった。ツイッターの性質や側面はよく分かったが、実際にツイッターを利用しているのは生身の人間なので、もっとツイッターをやっている人自身と、その人のツイートを連動させていき、文中にも属人化の話があったが、生身の人間とネット上でのギャップを研究すれば面白くなると感じた。（山田）

まず本論は例示を多用し、ツイッターをあまり知らない私のような人間にもその内容が掴みやすくなっている点は評価すべきであろう。またツイッターの持つ性質をよく理解し、その特徴を事例から分析できている。しかし本論の目的であったツイッターとメディア露出に関しては分析しきれていない感じがした。どちらかといえばツイッターの利用方法を言及し、それがメディア露出している人間と我々一般市民との関係性にどのような影響を与えているかを社会的に分析した論文のように感じる。まとめると内容についてはよくまとめられているが、最初の設定テーマと最後の結論の間にズレが生じているのが少し残念である。（高橋）

私自身 twitter を活用しているので、twitter 研究は興味深かった。有名人を４つのカテゴリに分け、それぞれの twitter 利用やツイートの特徴を踏まえた上でのメディア露出との関連性についての研究であるが、４つのカテゴリの中にも違いと同系統のツイートなどが見られ、縦横にツイートに対して類型がさらに分けられるようだ。Twitter に無数の他メディアが内蔵されているということだが、他メディアとの関連とカテゴリによる違いについて詳しい既述を見たいとも感じられた。（大谷）

ツイッターでのフォロワー数とメディアの露出の関係性は、一歩間違えれば普通のメディア論になってしまったと思う。つまりツイッターという現代ならではの特徴がもたらす社会的影響を分析する面白さを殺してしまうことになるのである。しかし、河本君の論文では、声優などといったツイッターという媒体で特に注目されるジャンルの人々を対象にしたことで、面白

い論文になっている。最後にもうすこし、社会の変化と関係づけるなど広がりを持たせてもよかったのかもしれない。（太田）

現代、大変多くの人が興味関心を持ち、そして実際に使用しているツイッターを題材としたため、非常に読みやすい論文でした。やはり、ツイッターの利便性は、リアルタイムと匿名性とネットの中における親近感という物があると私も感じました。mixi 等の SNS は、確かに親密度やリアルタイム性を持ち合わせてはいますが、現実における人間関係に拘束される側面が存在することは否めません。そのリアルから脱却した上で、現在の自分を常に発信することにより、コミュニケーションを可能にするツイッターの可能性を大いに感じ、再認識させられました。（村井）

テーマが時代に沿っていて、面白かったです。ツイッターというまさにホットなテーマを実際のインターネットでの画面を引用しながら、分析がされていて、読みやすい内容でした。自分自身、ツイッターのアカウントは持ってはいるけどいまいち活用できていない立場にあったため、この論文の内容は興味深いものがあり、非常に参考になる部分もあった。ツイッターというメディアを通じて芸能人の存在が身近になった現在、一種の宣伝方法として活用している人やテレビ番組の一環として活用する人、また本音を漏らす場所として活用している人など、その用途は様々で、ツイッターの持つ魅力、可能性を感じさせられました。（宮本）

日頃自分は「ツィッター」や「ミクシィ」といったソーシャルネットワークサービスとの関わりが無く、それらの違いはもちろんどのようなものかも知らなかった。河本君の論文はそういった自分の様な人間でも読めるように、それらのことについて詳しく説明したうえで考察に入っていた。そのおかげで、自分にとって未知のモノについての記述についてであってもスムーズに河本君の考察を読むことができた。また、ツィッターの投稿者の四分類についても質的・量的双方からの考察のアプローチが試みられていて、ソーシャルネットワークサービスについての知見が一気に増えたような気にさせてくれる論文だと感じた。（松原）

すごくおもしろいと思いました。ツイッターによって有名人の目撃情報など、多くのことをリアルタイムで知ることができる。そして、誰もがその情報の発信源になることができる。これはとても怖いことだと思います。誰がどこで何をしているのか、すぐに手軽に分かってしまうからこそ、その規制というものがこれからはすごく大事になってくるのではないでしょうか。（近藤）

日比　大輔

日本の農業が抱える課題　――ビジネスという観点で――

日本の農業は弱い。これが国内で持たれている農業のイメージではないだろうか。事実国の方針では農業を積極的に保護しようとしている。しかし、保護した結果として農業が良くなっているかどうか疑問である。そこで国が行ってきた農政を検証することでいかに改革してゆくべきか考察する。

国内の農業生産額はおよそ８兆円で、日本は世界５位の農業大国なのだ。農業の担い手が減ったのも、減ったにもかかわらず生産性が向上したのもどの先進国にも見られる現象で日本だけが特別悪いわけではない。農業人口の低下（担い手不足）も、耕作放棄地の増加も、自給率低下も実は問題ではない。根本的な問題は政官農の癒着であるが、農業に関する問題を解決するには、農園レンタルや農家組合の結成、農地の集約を行った上で、海外市場に日本の農産物を輸入する農業ビジネスを展開することが必要である。

［キーワード］農業ビジネス、減反政策、日本の農業は強い、米粉、農政

［相互批評］

著者の意見は昔から繰り返し言われてきた内容で、農業をもっと自由化してビジネス志向にすれば、日本の農業も強い競争力を持てるはずだというものだ。しかし、日本の農業は反対にますます保護主義的になりつつある。ではなぜそうなってしまうのか、という問いをもっと掘り下げてほしかった。筆者が広島のＪＡを訪ねて米粉を使った食品開発について取材したのは良かったが、せっかくの素材が他の議論とうまく噛み合わないままなのが残念である。（鵜飼）

気になったのは、ゼミの中で兼業農家の８割は赤字となっているという話です。趣味で農業をやっているのではなく、農業だけで食っていけないから他の仕事をしているとも考えられそうなのですが、実際どうなのでしょうか。最後に、兼業農家の人たちをどう支えていくか考える必要があると記述されていましたが、日比君なりの具体的な考えが書いてあれば良かったと思います。ビジネスとして農業を確立させるための具体案、ここを詳細に書いてもらいたかったです。（百田）

日本の抱える農業の問題、食糧問題に関して、日比くんの立場や意見がはっきりしていて読みやすかった。日比くんの日本の農業における体制が悪いからビジネス介入が必要であるという考えに納得したし、きっと日本では農業に楽しみを覚えられないから後継者問題も起こるのだと私自身考えた。ＪＡ広島へ実際に向かったのも、米粉という新たな策を講じるためにも良かったと思う。ただ食糧自給率の問題については現状の政策を追うのが多かったので、もっと

スーパーなどに調査に行っても良かったのではないかと思う。政府についての農家の人たちのリアルな意見も気になった。（山田）

日本の農業問題をテーマとして扱い、その現状や背景これからの解決策を文章におこしていることは読んでいても十分に理解ができた。だが序盤に筆者自身が農業のどの部分に関心を抱き、どの点について焦点を当てているかが明確に記載されていなかったため、読んでいる側の人間としては論文という感じは薄かった。結論部分から推測すると、第一章は食料自給率も低さについてのみ記述し、第二章以降で農業人口の低下が原因と設定して、今後の対策等を論ずればもっとスマートな論文になったのではないかと思う。（高橋）

農家を取り巻く現状について詳細に語られており、抱えている問題や農家、行政の問題点を指摘するだけでなく、そもそも自給率とはといった疑問について、日本が抱える食の問題についてなどといったところまで言及されている。これらを踏まえた上で、日本の農業の課題を挙げ、それについての解決策を掲げようと試みている。本文でも分かる通り、「食」を取り巻く問題は多く偏にこれと言えない。ゆえに解決策として挙げられた組合形成やレンタル農園など、これからの農業のビジネススタイルの展望や現状について詳しく知りたいと思った。（大谷）

日比君は、昨年のゼミの時点から、日本の農業の競争力の強化をテーマに一貫した姿勢を持っていた。それがこの論文でもぶれていない。そのことがまず評価に値すると思う。国際競争に即した体制にシフトすることが、今の日本の課題でもあると同時に農業という対象は現政権においても「保留」されている感じは否めない。TPP が議題に上がることが多くなった今、日比君の農業のビジネス的要素を強めるという結論はシンプルでよかったと思う。これを地域社会や共同体といった他の要素を含ませると結局、消極的な現状維持、というようなあいまいな結論になってしまっただろう。（太田）

日本は、どの面を見ても結局根底には人口減少による市場の削減と言う問題が大きくのしかかってくるということを感じました。その少ない市場の中で、既に発展する面は発展しきってしまい飽和状態に入ってしまい、またそして衰退した面は歯止めが利かないほど衰退した日本の産業全体を支えるものは、多角的な面でのビジネス化を特化することだな、と日比君の論文を読んで、痛感しました。そして、市場の大幅な拡大のための海外との、輸出輸入関係の強化により、日本らしい農業の様式を残しながらも、市場拡大による農業界の発展が臨めるということを非常に納得しました。（村井）

知っているようで実はあまり知らない日本の農業の裏側を垣間見ることができました。現状として日本の農業の抱える問題と、その多さを知ることができました。しかし、その一方で多くの問題点が列挙されてはいますがその具体的な解決策や案などがしっかりと提示されているわけではなく、ただ問題点を挙げた、という印象も受けました。とはいえ、米粉という新しい可能性についてインタビューの調査も載せられていて、実際、テレビなどのメディアでも米粉の露出は増えているように感じる点もあり、その米粉の持つ可能性について考えさせられる内容でした。もう少し、この米粉に関するインタビュー調査のところのボリュームを多くしてみてもいいのかな、とも感じました。（宮本）

食糧自給率についての記述は、この手の論文に目を通さないと知り得なかったような事実が書いていて非常に興味深かったが、数的データが多く登場する中で文字上の情報だけでは少しわかりにくいような印象を受けた。せっかく数的データを用いた論述をするのならば、グラフ等を用いて読みやすくするとより良くなるのではないかと思った。また、語句についての説明をもう少し丁寧にしてもらえると、読者への垣根の低い読みやすい論文になると思った。（松原）

今、関税をなくそうという声がありますが、それをすると日本の農業は一瞬にして消えてなくなってしまうでしょう。アメリカで作られているコシヒカリ、かなりおいしく日本のコシヒカリより大分安く購入できるそうです。企業が大規模な農園を作るなどしか方法はないのでしょうか。もっと他に昔ながらの農家を守っていく方法を考えていきたいと思いました。（近藤）

日本の農業が直面している問題についての理解が深まる論文でした。今の農業は既存の形式からの脱却ができておらず、時代の変わった現在では構造そのものを変え、きちんとしたビジネスとして成立させないと存続は難しいのだと感じました。全体として、日本の農業の主な問題点についてはうまく分析できているのですが、対策についてはもう少し踏み込んだ内容があれば、より意義のある論文になったのではないかと思いました。また、テーマとしても少しシンプルすぎる印象を受けました。（河本）

百田　稔宗

タクシー業界が抱える構造的問題　――京都市を例に――

タクシー業界で問題となっている交通問題や乗務員の労働環境悪化の主原因は、景気の悪化に伴う需給バランスの崩壊であり、それまで主原因だと考えられてきた規制緩和は、需給バランスの崩壊に拍車をかけた二次的な要因であることを明らかにしている。そして、乗務員の労働環境悪化の要因について、需給バランスの崩壊という外的な要因だけでなく、業界が抱える二つの構造的問題として、業界内に蔓延している事業者の遵法意識の低さと特殊な給与システムを挙げている。しかし、この構造的問題があるゆえに、タクシー業界は高齢者の雇用の受け皿となっているのである。つまり、構造的問題を改善しようとすれば、高齢者の雇用が失われ、高齢者の雇用を守ろうとすれば、乗務員の労働環境の改善が図れないという矛盾をタクシー業界は抱えているのだ。本稿は、タクシー業界、各方面の取り組みを考察することによって、業界の将来像について言及し、タクシー業界内で起きている労働環境悪化という問題が、資本主義社会の矛盾である高齢者の雇用という問題と関連していることを明らかにしたものである。

［キーワード］タクシー、構造的問題、労働環境、高齢者、雇用

［相互批評］

著者の実家はタクシー会社を経営しており、業界の実態をよく知った上での研究なので、読んでいて迫力があった。タクシーの乗務員にインタビューした上での議論も興味深かった。この種の研究は需給ギャップなどのマクロな視点からの研究と、「裏事情」に迫るエスノグラフィー的な研究との両極に分かれがちであるが、この論文ではマクロな統計と当事者の認識のズレを埋めながら丁寧に、まさに社会学的に問題に迫ろうとしているところに好感を持った。(鵜飼)

インタビューから見える実情やサービスに対する乗務員の意見、高齢者の雇用問題など、随所に百田さんならではの記述が見られて良かったと思う。ＭＫタクシーの乗務員は、賃金に不満があるのに、どうしてサービス指導には歯向かわず会社の方針通り行うのか疑問に思ったし、Ｏ氏へのインタビューで、Ｏ氏は需要の落ち込みがなぜ阪神大震災によってだと言えるのか、感覚だけでなくＯ氏がそう言えるのか理由も気になった。またＯ氏の実名が途中で出てきたのは、論文として是非修正した方が良いと思う。また、３章４節で、「すぐ退職というカードが切れる」という記述があったにも関わらず、収入よりも雇用を気にする高齢者の乗務員がいることについて少し矛盾も感じた。(山田)

疑問点から研究、考察に至る経緯まで論文の形態が理解しやすく、個人的には評価の高い論文である。タクシー業界が抱える問題点は新聞等で見かけることはあっても、その内面をここ

まで調べ上げているのは筆者のフィールドワーク(参与観察)の賜物といえよう。ただ私自身は筆者がゼミの時間に話していた内容という予備知識があったために比較的スムーズに内容が頭に入ってきたが、初めて論文を読む人には少し小難しい話かもしれない。具体的には、タクシー業界では台数の増加が売り上げの増加につながることの注を入れればよかったのでは。(高橋)

タクシー業界が抱える構造的問題がインタビューによる乗務員の生の声、表やグラフを用いて分かりやすく解説されていた。まとめでは問題解決と業界もしくは個人の利益、行政が抱える雇用問題ひいては日本経済問題のジレンマが分かる。タクシー利用者としては様々な問題を抱えていようとも安い運賃で利用出来ることが望ましいし、東京に住みそこでタクシーを利用したことのある私にしてみれば運賃が高い、道が分からない、サービスは悪いは当たり前で、むしろ京都の大手タクシー会社は良質に思えるぐらいである。タクシー業界が抱える問題は改善に向かう体裁をとってはいるが、変わることがないだろうという思いが本論を読んだ感想である。(大谷)

タクシー業界が、一見コンプライアンスの低い業界であっても、それは雇用側、被雇用側双方の妥協点であるという結論が面白かった。タクシー業界内部の詳細な見識がこの論文に、しっかりとした根拠と論理展開を与えていると思う。この論文を読んで、このような双方の無言の同意で成り立っている組織というものは、保守的な力が強いが、いったん介入されれば組織内で混乱を引きおこしてしまうかもしれないと感じた。(太田)

百田くんの卒論はとても分かりやすく、簡潔に無駄無くまとめられている論文だと思いました。タクシー業界の内情と言う普段はあまり垣間見ることのない状況を、百田君だからこそできるインタビューや考察を踏まえながら論じられていて、大変面白かったです。基本的には、どの様な社会問題にも高齢者の・・・・という、高齢者がらみの問題は避けられないのだということを痛感しました。現在、高齢者の雇用の受け皿としてのタクシー業界が行わなくてはならないことは、構造改革であり、それには高齢者から職を奪うことになる。この問題は、タクシー業界だけでなく日本の中心から、政治から、早急に高齢者の雇用問題について、再考しない限り解決は難しいと思いました。(村井)

百田さん自身、現在親の会社の手伝いでタクシーを運営する会社で働いている経験を生かして書かれたこの論文は、その立場をうまく利用して、ドライバーへの踏み込んだインタビューなど、内部の人しか知りえないような情報もあり、非常に興味深い内容でした。普段何気なく利用していたタクシーでしたが、読んでいくうちに、知らなかった事や新しい発見が多くあり、

楽しく読めました。また図やグラフも見やすくうまくもとめられていて、読み手に優しい論文だと感じました。タクシー業界の問題だけでなく、日本の社会全体の抱える問題へとリンクする部分があり、深く考えさせられる機会になりました。（宮本）

まずこの論文を読んでタクシー運転手に対するイメージが一変した。またこの問題に対しても単に需要と供給のバランスの崩壊だと乱暴に投げやりになること無く、実際のドライバーへのインタビューにおいて生の声を記述に反映させているので、記述に説得力が生まれていると感じた。また、問題をタクシーの運営会社だけでなく社会構造にまで広げていながらも、結論がぼやけることになっていないところにさすがと思わざるを得なかった。グラフも見やすくて◎（松原）

タクシーやタクシー会社の裏側を見ることができてとてもおもしろかったです。社会の中でタクシー業界があるから救われている人もたくさんいるのではないでしょうか。百田さんにしか書けない題材だったと思う。最近はやっているツィッターをタクシーの運転手の方達が使うようになったらおもしろいのではないでしょうか。（近藤）

実際にタクシー業界に身を置く百田さんだからこそ書けた論文だと思います。タクシー業界では労働環境と高齢者雇用が天秤にかけられているだけでなく、外部からはなかなか推測のできない複雑な問題を抱えている、というのはとても真新しく、興味深い分析だと思います。私自身まったくそのようなことは思いもしませんでした。タクシー業界が今ある環境を改善しようにも、それぞれの会社は自社の利益を追求する。労働者の環境を改善するならば行政や法整備に依存しなければならないというのはなかなか厳しい現状で、業界内の自浄作用にはもはや期待できそうもないですね。（河本）

タクシー業界が抱える問題は難しい問題だと思います。なぜならトレードオフの状態になっているからです。しかし、それはタクシー業界のみで解決すべき問題か、またタクシー業界のみで解決できる問題なのか、ということを考えるとそれは違うと思います。しかし、タクシー業界で取り組むべきことは何かと考えると、京都などの市街地にタクシーは溢れすぎているので、それらのタクシー運転手を地方で買い物や送り迎えなどの様々な用途を満たせるバスタクシーの運転手として雇えば良いのではないでしょうか。（日比）

保田　慶輔

国籍の在り方　――在日の国籍、人権とアイデンティティ――

現代の代表的ともいえる社会問題である、在日コリアンの人権問題。在日の歴史はおおよそ100年になるが、かつて日本の植民地支配の当初はろくに日本人扱いをされないなど、様々な人権に対する差別をうけてきた。彼らのような在日韓国・朝鮮人はどのような経緯で日本に移り住むようになったのか。また今日では参政権において在日に対しての権利は守られるようになりつつあるが、そのことが逆に日本の国防上の問題となっている。近年、日本においての外国人登録者のなかでの在日コリアンの比率が年々減ってきており、在日が少数派になることは時間の問題だといわれているが、在日がいなくなること＝人権問題が解決するというわけではない。むしろ、これからも在日の数が減り続け、この国から姿を消す時が来るとしたら、それまでに必ず解決しておかなければならない問題なのである。彼らは日本に住み続けることで帰化するということがあるが、現代での日本の帰化制度は手続きが多く、なかなか簡単に取得できるものではない。しかし最近では政府による国籍取得の緩和により、在日の人たちが日本においての権利を確立しやすい環境になってきている。あとは日本国籍の取得を躊躇してきた在日の人々自身の発想の転換次第なのである。

［キーワード］在日コリアン、人としての権利、帰化、国籍取得

［相互批評］

在日コリアン概論のような論文だった。ただし、それぞれの論点の背景にはいろいろな立場があるので、そのあたりの機微をもっと掘り下げて論じてほしかった。また、日本と韓国、日本と「朝鮮民主主義人民共和国」との関係はこの10年間だけを見ても大きく変化した。グローバル社会における影響力をみれば韓国は日本を上回りつつある。他方、軍事力を見れば「北」は核保有国としてアジアの台風の目となりつつある。世界やアジア全体から「在日」の意味を考える必要がありそうだ。（鵜飼）

在日朝鮮人の問題に関して、可能であるならば、強制連行した人と密入国者を分ける必要があるのではないかと感じた。その上で、権利の問題を考えなければならないと思いました。アイデンティティの問題に関してですが、朝鮮人としてのアイデンティティがあるから、日本国籍を取得しない人がいるのではないかと思います。この論文で、そういう人たちに「日本国籍を取れ」と言う必要はない、という記述がありましたが、むしろそういう人達の権利をどうしていくかが問題なのではないかと思いました。（百田）

歴史的にも差別といわれてきた在日の問題であるが、今はさほど問題でなくなってきている

ようにも感じた。論文を通して、今もなお差別が拭いさられず残っている理由は、国籍の問題に加え、差別されているという意識によって権利に固執しすぎている在日の人たちの動向にもあるのではないかと思った。もちろん、年金や参政権においては除け者にされているような気にはなるが、在日の人たちが余計に溝を深めているようにも思えてしまった。述べていること、筋はよく分かったが、国単位ではなく、もっと地域やコミュニティ、個人の取り組みにまで落としこんで調べても良かったのではないかと思う。また、まとめ（総論・結論）が最後に欲しいと思った。（山田）

国籍問題の定義から解決策まで要所を押さえた論文であると感じる。在日コリアンの話題を基本に据えつつもアイルランドの選挙権を引き合いに出すなど、テーマの国籍から軸がぶれていない印象も受けた。しかし論文というにはやや自分の意見が弱いように感じられた。私の意見としては、第３章、第３節の「国籍取得権」の部分はもう少し深く追究すべきだと感じる。意見の提唱は 2001 年当初のことについてしか述べられておらず、現状が述べられていない。やはり社会学としては現状の言及は必要ではないであろうか。（高橋）

まず民族差別について私はほとんど意識せずに暮らしてきた。周りに日本国籍でない人物もいたし、東京にも外国人街はあるが、関西の学校で見られるような様々な差別問題についての教育を全く受けてこなかったからだ。そのため、あらゆる差別問題について敏感である関西の様子は不思議に思える一方で。「そういうことか」と自分自身に色眼鏡をかけて関西の街を見るようになったことも事実である。本論では在日朝鮮人のアイデンティティと国籍問題について取り上げられており、これら問題は今後より一層、在日朝鮮人の方々に限らず、在日コリアン問題とは歴史の重みなど違うが、外国人が移住してくると思われる日本では行政へ加わることを再認識再考しなければならない問題であると感じながら読み進めた。（大谷）

在日コリアンの問題を、国籍取得、つまり社会制度の問題と絡めて論じていた。制度と民族という大きなテーマを扱った論文であったと思う。具体性と筋道の通った論文であった。現代の在日のもっと具体的な生活や心情についての記述がもう少しあってもよかったかもしれない。（太田）

社会学部に在籍している上で、必ず学習する国籍の問題であったため、読み始めは大変取り掛かりやすかったです。その代わり、読み進めていくにつれて、やはり日常で自分自身のアイデンティティについて考える習慣がないからなのか、少し難しく感じる所が多かった様に思えました。普通に日本語を話し、日本国で生活を営み、日本の文化様式に慣れ親しんでいたとし

ても、国籍という存在は特別な物で、安易に帰化を勧めるものではないし、個々の深いところにある故郷に対する気持ちを推し量る必要があるということが分かりました。（村井）

これまで、テレビのニュースなどで在日朝鮮人の特集などを見るたびに、帰化すればいいのに、と軽く考えてしまっていたところがあったのですが、それについて考えるいい機会となる論文でした。一言に帰化すると言ってしまえば簡単には聞こえますが、国籍を変えてしまうわけですからもちろん、気持ちの上で踏み込めない人達も多くいるとは思っていましたが、手続きが多く、それが面倒で、という人もいるのではないか、という意見は驚きで、手続きをもっと簡略化するべきとの意見には賛成します。とはいえ、国籍の問題は難しいもので、在日の外国人の課題は多く、なかなか尽きることはないのかな、と改めて実感させられました。（宮本）

在日韓国人についての記述は、何か日本人として読むとムズ痒くなるようなものに自分は感じる。日頃知り得ない在日韓国人の問題について保田さんが大阪市平野区に済んでいるからこそ持っている感覚も交えて記述されていて、事実を知る上では非常に良い論文だが、筆者自身の考えをもっと知りたかった。保田さん自身の考察についての記述の少なさも少し残念に感じるが、せっかくそのコリアンタウンの近くに住んでいるのだからインタビューを有効に活用すればより良い論文になると思った。（松原）

在日韓国・朝鮮人についてその歴史から形成、現在おかれている立場などさまざまな観点から分析が加えられていて、非常に理解が深まる論文でした。ただ、在日コリアンの人たちが置かれている状況を問題視する保田さんの思いは伝わるのですが、論調としては在日コリアンの人たちには国籍が与えられるべきだという単純な論法が終始使われている点に少し物足りなさを感じました。せっかくならばもう少し踏み込んで、状況を改善する画期的な提案やその具体例などを盛り込んだものになるとより意義深い論文になったのではないかと思いました。（河本）

在日コリアンの友達が僕にもいますが、日本名を名乗っていたため本人のカミングアウトを受けるまで全く気付きませんでした。僕の高校では苗字に韓国名を名乗っている人もいましたし、色々な在日コリアンの方々が身の回りにはたくさんいるのだということに高校生の時気付きました。それを知ったからどうこうということはなく、「ふ～ん、在日なんだ」と思うだけでした。話す言葉も互いに共有している文化も全く同じなのに、国籍上は違うと言われてもそれも実感はあまりありませんでした。すでに在日 3 世、4 世の時代へとなっているので、日本国籍が取得しやすいように取り組むべきなのかもしれません。（日比）

以上